

7/17 五旗

規制委試算に島崎代 理が異議

「不確かさ」 欠け過小評価

関電 大飯原発地震動

15日に都内で会見した原子力規制委員会の前委員長代理の島崎邦彦東京大学名誉教授は、規制委が13日に発表した関西電力大飯原発（福井県）の地震の揺れに関する試算に問題があり、「規制委の議論と結論には納得できない」と繰り返し述べた（16日既報）。試算に対する規制委の結論ありきの姿勢が問題になりそうです。（松沼環）



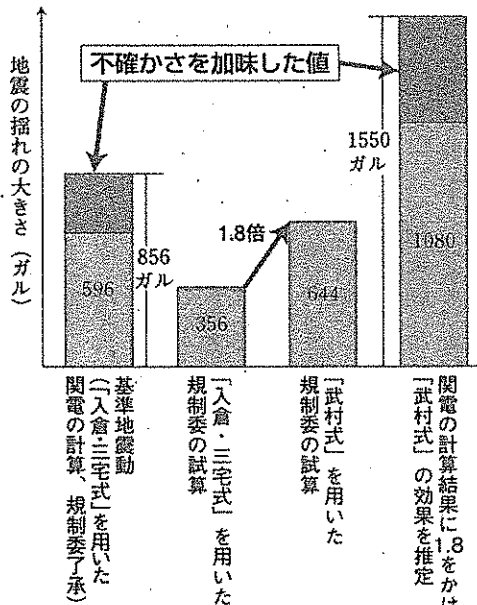
会見する島崎前委員長代理15日、東京都港区

島崎氏は、基準地震動の大きさの予測に「入倉・三宅式」を用いると、垂直や垂直に揺れる揺れの策定で地 いると、垂直や垂直に揺れる揺れの策定で地

摘を受けて垂直な断面に入倉・三宅式を用いて基準地震動を評価している大飯原発で、異なる予測式「武村式」を使って地震の揺れを試算しました。

その結果、規制委は、武村式を用いた場合の地震の揺れは最大で644ガル（ガルは加速度の単位）で、規制委が審査で了承した大飯原発の基準地震動（556ガル）のレベルに収まっており、見直さなければならないと結論づけました。島崎氏は会見で、規制委が行った入倉・三宅式を用いた結果の3割程度のケースで求めた値は596ガル、同じ入倉・三宅式を用いた規制委の結果は、これを約1.8倍と大きく下回ります。

大飯原発の地震動計算の比較



規制委は、関電が用いた詳細な解析上の設定を十分把握できず、関電の設定と異なるためと説明し、島崎氏は、武村式を用いた解析は、入倉・三宅式での結果が関電「不確かさ」を考慮した場合を関電の計算値856ガルから推定。その結果、約1550ガルとなりました。島崎氏は「高い精度の推定ではないが、現在の基準地震動が過小評価されているのは間違いない」としています。規制委の定例会合の試算の説明では、武村式を用いた規制委の試算と関電が「不確かさ」を考慮して求めた基準地震動の値が示され、規制委は、このままでは比較の対象となりにくい、これらの値を比べたのです。島崎氏は19日、規制委の田中俊一委員長らと面談する予定です。